

査斯查干

1. 事業実施の目的：博士論文を作成のためのデータ収集
2. 実施場所：モンゴル国ホブド県
3. 実施期日：平成 31 年 02 月 01 日（金曜日）から 02 月 16 日（土曜日）
4. 成果報告

●事業の概要

「森の民」と呼ばれるオイラドはモンゴルと異なる系統であるが、13 世紀にモンゴル帝国の支配下に入って、その一部を成すようになる。モンゴル帝国の解体や再編成の過程で、オイラドは従来の集団に新しく加わった複数の集団からなる部族連合「四オイラド」連合と称するようになる。この「四オイラド」連合はジュンガル、ドルベド、ホシュド、トルグドを中心に組織されていた。しかし内部の争いや遊牧地の不足などを原因として 17 世紀の初期にホシュドが青海高原へ移住し、トルグドがロシアの地へ向かい、連合が崩壊する。故地に残った諸族はジュンガルを中心に「最後の遊牧帝国」とも言われるジュンガル帝国を築く。それとほぼ同時代に東から台頭してきた満州の清朝が内モンゴル、ハルハモンゴルを相次いでに統治下にいれ、ジュンガルとも百年近く戦争を繰り返す。

18 世紀中葉にジュンガルは清朝に滅ぼされ、その地は長年の戦争とその後の伝染病、虐殺によって人煙希少となる。ジュンガルの崩壊後、ロシアのヴォルガ河畔にいたトルグドが故地を向かって帰還する。清朝はトルグドを盟旗制度に編入し、新旧トルグドと分ける。旧トルグドは 17 世紀初期にロシアへ移住した集団であり、新トルグドはジュンガルの領内にいたがその崩壊後にロシアへ逃げて行った集団を指す。

旧トルグドにはウネンソソクト南路盟、ウネンソソクト北路盟、ウネンソソクト東路盟、ウネンソソクト西路盟という 4 盟が含まれ、それぞれヨルドス河あたり、ホボクサイル、ハラウス、ジンヘ河あたりに遊牧地を与えられた。ウネンソソクト南路盟はオバシ・ハーンの属民で、3 旗とその下に 53 ソムを設置された。ウネンソソクト東路盟には 2 旗 7 ソム、ウネンソソクト西路盟には 1 旗 4 ソム、ウネンソソクト北路盟には 3 つの旗とその下に 14 のソムがそれぞれ設けられた。新トルグドはツェレンに率いられ、チンセトゲレト盟と称され 3 つの旗 4 ソムを設け、トルグドと移住してきたホシュドをバトセトゲレト盟として 3 つの旗と 11 ソムを設置した。このようにしてトルグドには天山山脈南北からアルタイ山脈周辺までの広い土地に遊牧地を与えられ、バラバラになって居住するようになった。

20 世紀初期に清朝が崩壊した後、これらのトルグドが中国とモンゴルにわけられ、旧トルグドが中国の新疆、内モンゴル、新トルグドはモンゴル国のホブド県に分布するようになった。20 世紀 30～40 年代の東トルキスタン独立勢力と国民党政府との戦争や軍閥間の争い、地方武装勢力の強盗などによって新疆トルグドの一部がモンゴル国のホブドへ国境を

渡って移住した。

これまでの調査と研究では、新疆ホボクサイル・トルグドを中心に帰還したトルグド集団の歴史記憶と語りを考察してきた。その過程で 20 世紀 40 年代にホボクサイルからホブドへ移住した人々が多いことがわかった。今回の学生派遣では、モンゴル国のホブド県ブルガン郡へ赴き、そこに暮らすトルグドの間で調査を行なった。

ホブドにおいてはブルガン郡にトルグドが集中して居住している。そのトルグドはバンのトルグド(ツェレン郡王の領民という意味である)とホボクサイル・トルグドとわかれている。ホボクサイル・トルグドはまだ帰還したときに清朝から導入した盟旗制度の旗・佐を単位で自らの出自を辿っている。彼らの間ではトルグドの帰還をテーマとする民謡、ことわざ、物語などが伝承されている。今回は、「バルダン」「広いイジル(ヴォルガ)ザイ」「アルイケホボクサイル」「コヴチの高い山」などの民謡と、「イジルの水とイリの水」ということわざとその背景に関する語り、「英雄アーニ・バルダン」の物語を収録できた。またブルガンのホボクサイル・トルグドとバンのトルグドが共通して「トルグド故郷」を歌い継いでいることがわかった。

トルグドの間における帰還に関する語りのほかに、歴史学的研究、文学作品にもトルグドの移住が取り上げられている。18 世紀の帰還を「トルグドの大移住」とし『トルグドトモンの大移住』『トルグドの大移住』といった書物が出版されており、20 世紀 40 年代の移住を『トルグドの小移住』として記している。

帰還したトルグドの内部でも歴史・社会背景の相違によって、歴史記憶とその語りが異なることが確認できた。しかし彼らのトルグドとしてのアイデンティティはその帰還の歴史と密接である。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の派遣事業で得られたデータをこれまでの調査データと照合し、博士論文の構造を検討する。

●本事業について

貴重な調査機会を頂きありがとうございます。